

# 造形 Journal

造形ジャーナル 図工、美術指導の可能性を広げる情報誌

造形ジャーナル 平成24年3月28日発行 Vol.57-1 (通巻414号)

## CONTENTS

### アート・エッセイ

童心で見、遊び心で造る/U.G.サトー

### 特集/再生への道

#### 第1回 ゼロからの造形教育

- 造形言語教育の大切さ/仲瀬律久 — 2
- 被災者の立場で美術(支援活動)を考える/新妻健悦 — 6
- 社会の中で子どもの力を生かすために/東健一 — 8

### 私の失敗談

～新米先生のために～/鈴石弘之 — 10

### 教材研究

- 自分の思いを豊かに伝えるために/関屋敦子 — 12
- 心をつなぐ絵手紙/衛藤拓典 — 14

### 図工室・美術室

- 発想力を呼び起こす活動を/宮久孝司 — 16
- 仲間とかかわり合う美術/齊藤岳洋 — 16

### 造形ピックアップ

書評『造形教育における授業デザインと授業分析』  
/小林貴史 — 17

新学習指導要領  
を読み解く

よくわかる  
図画工作科  
学習指導要領

好評  
発売中

# ビジュアル解説 授業への生かし方



- 藤澤英昭/監修
- 石賀直之 西村德行 三澤一実/共著
- B5判/96ページ(カラー)+資料16ページ付き
- 定価 2,415円(本体2,300円)

豊富な作例  
や活動例で  
学習指導要領を  
解き明かす、これ  
までにないわかり  
やすい解説書です。



移行期から役立ちます!



よくわかる  
図画工作科  
『評価』のしかた

- 全3冊シリーズ(低学年編・中学年編・高学年編)
- B5判/96ページ・オールカラー
- 定価 各2,415円(本体2,300円)

造形ジャーナル  
Vol.57-1 (通巻414号)  
定価120円(本体114円) 送料120円

平成24年3月23日印刷 平成24年3月28日発行(年3回発行) 編集兼発行人 大熊 隆晴  
印刷所 株式会社興陽社 〒113-0024 東京都文京区西片1-17-8  
発行所 開隆堂出版株式会社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1  
☎(03)5684-6121(営業)、5684-6118(販売)、5684-6117(編集)/振替 00130-8-75296  
http://www.kairyudo.co.jp/



# ART ESSAY

アート★エッセイ

## 「童心で見、遊び心で造る」

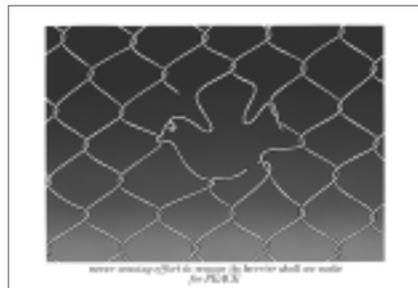
U.G.サトー  
(グラフィックデザイナー)



一見つまらぬことをおもしろいと感じたり、さらにそれをもとに楽しく発展させることは、童心の遊び心がなせる私の創造の基本と言えるだろう。

晩秋の朝、たくさんの落ち葉が散った公園でふと気づいたことがある。形も大きさもさまざま、赤や黄に色づいた落ち葉のほとんどが、葉表を下に、葉裏を上にして落ちているではないか。落ち葉がこんな状態で地面に落ち、散りばめられているとは、今まで気づいたことがなかったし、教えられたこともなかった。しかし、私にはとても新鮮な発見でうれしかった。リンゴが落ちるのを見て、引力の存在を発見したニュートンのような気分さえあった。私は落ち葉の地面への収まりのよさがそうさせたのだろうと思うが、その理由はともかく、この発見だけで十分満足であった。

かつて平和のポスターのアイデアをあこれと考えていた時のことが忘れられない。近所の金網のフェンスに囲まれた空き地で、遊ぶ子どもたちが出入りするたびに、こじ開けられた破れ目の形がおもしろかった。私はその破れ目をアイデアのヒントとしてスケッチした。その形を飛び立つ鳩に変えてみると、複雑ないざござから解放されて、すっきり平和が生まれてくるような気さえた。こうした単純な見立てが意味の深いポスターに生まれ変わることはそうあることではないが、おもしろいことである。



「平和のためのポスター」(1978年)

昨年、私の住む東京・神楽坂の伝統芸能祭のポスターを頼まれた時、この町らしい敷き詰められた石畳の一角を表現したかった。石畳の道を表現するには、筆やペンで描いたり写真を撮ったりしても実感が出ない。私は手元の消しゴムを小さく石畳形に切り取りハンコとした。灰色の絵の具をつけては、敷き詰められた状態に沿って押していくと、さながら路地の雰囲気やを彷彿とさせるようだった。

こんなふうには、身近なものを探しては、それをヒントにしながら発展させていくやり方は、ワークショップの時にも生かすように勤めている。



「かぐらざか伝統芸能ポスター」(2011年)

## 特集 再生への道 第1回 ゼロからの造形教育

### 「生きる力」の核にいる造形教育

昨年、我が国は歴史に残る自然災害と科学技術の根幹部分の危うさを経験した。世界規模では経済の仕組みが根底から問い直されようとしている。人々は大きな試練の前で、ただただ立ち尽くしているように見える。

しかしながら、気仙沼や陸前高田などの避難所で一心に何かを描き続ける子どもの姿を前にしたときに、何かしら絶望的に思えた壁を超える大きな道を見ることができた。また、造形教育が有効であるとともに、再度問い直さなければならない部分があるとも感じられた。学校を離れた子どもたちは、評価や表彰、対価を期待するのではなく、また先生や親に言われるのでもなく紙に向かっていく。何もない紙の上に…。紙の上に自分を残し、外界との接点の記憶を色や形で表している。おそらくそこには人としての原初性があり、人がこの世と関係性をつくる時に描き出すという避けがたい行為があるように思う。このことこそが造形教育の原点であろう。

造形教育の原点を問う場面は、新しい秩序を構築する第2次大戦後にもあった。その折も絵を描く子どもに注目が集まった。映画『絵を描くこどもたち』(1957年)は戦後の美術教育の一つの結論であった。

何も描かれていない紙の上に、まさに象徴的に何もない紙の上に何も指示されず、強制されずに表現する活動は、過去のあの時に戻るのではない。新しく生まれ変わる自分をつくっていくことだ。そして、新しい世界がつくられていく。

私たちは、これまで学校教育全体が選抜主義の恐怖に怯えて、表現の教育を軽視してこなかったか。細分化した教科の内容をどこまで集めても、文化や人間全体を見渡すことはできない。造形活動はまさに「生きる力」の核にいる。今、期待されていることは大きいはずだ。

## 造形言語教育の大切さ

～色・形などによるコミュニケーション～

聖徳大学教授 仲瀬 律久

### 1. はじめに

2011年3月11日の東日本大震災は一次災害の津波の想定外の巨大さはもとよりのこと、二次災害である放射能汚染被害の凄まじさにおいても全世界を震撼させ、「FUKUSHIMA」の名は世界に喧伝された。

復興への人的・物的・財政的支援などが数多くなされるなかで、美術あるいは美術教育という立場でどのような支援ができるのかという課題に応じて、美術作品のチャリティーを始めとして教育現場への画材などの支援など、善意の活動が数多くなされてきた。

このような、外部からのさまざまな支援や励ましの声に対応する形で、地元福島からも全世界に向けて、美術教育の発信があったことは特筆すべき事柄である。その全貌が『教育美術』（2011年6月号）に、「被災後の『風と土』」のなかで、美術教育と日本文化をめぐって『Koi 鯉アート のほり日誌から』と、「東日本大震災支援 ワークショップ『Koi 鯉 アート のほり』つくろうに参加して」に紹介されている。

この活動は、福島大学の渡邊晃一（芸術による地域創造研究所所長）の主導によるもので、茂木一司（群馬大学教授）らの支援を受けて、震災2週間後からいち早く行われたものである。これまでアーティストとして地域文化や美術、そして未来を担う子どもたちの活性化を願って「風と土の芸術祭」などを企画・運営してきた渡邊にとっては「避難所」という空間や子どもたちと向き合うなかで、私は一方的に子どもたちに与える活動から、子どもたち自らがもの作りの楽しさを発信することで、『場』を生み出す循環的な活動に転換できることを願った<sup>(1)</sup>ことは当然のことであったと思われる。

この発信は、InSEA（国際美術教育学会）会長リタ・アーウィンにも届き、多くの国々からの反響のもと、国内外から「鯉のぼり」作品が集まり、本プロジェクトは大きな成果を挙げたという。『教育美術』誌に紹介された国内外の作品を見ると、色や形などによる造形言語が言葉を超えて、国際的にコミュニケーション上立派な役割を果たしていることがよくわかる。

このように、子どもたち自らがものづくりの楽しさを発信する場を得て活動することで、災害に負けない子どもたちのパワーを美術を通して世界に示すことができたことは、本巻頭言にもあるように「造形活動はまさに『生きる力』の核に在る」ことを彷彿とさせるものである。さらに、「避難所で一心に何かを描き続ける子どもの姿を前にしたときに、何かしら絶望的に思えた壁を超える大きな道を見ることができた。また、造形教育が有効であるとともに、再度問い直さなければならない部分があるとも感じられた」という一文もある。

同じような思いを1885年のある日、若き画学生であったF.チゼックはウィーンで子どもたちが塀などに描いた落書きを見て、その表現の中に大人とは異なる生き生きとした表現があるのを発見し、興味をもった。児童の絵画による教育に目覚めた彼は、それ以来、画家ではなく子どもたちの創造を支持する教師となった。その彼が残した「子どもたち自身によって成長させ発展させ、成熟させよ」という言葉は、今では不朽の言葉となっている。

子どもたちが生得的にもっている創造の芽を引き出し、導いていくInside-outの教育は引き継がれて現在に至っているが、美術教育においてもOutside-inの教育とのバランスが必要であると米国立スタンフォード大学のE.アイズナーは筆者に語っている。

### 2. コミュニケーションとしての造形言語

前述のように、色や形などの造形言語によるコミュニケーションは国際的である。文字言語が母語に限定され制約されるのに対して、造形言語は開放的であり、社会的にも文字言語以上に重要な役割を果たしている。その領域は心象表現だけにとどまらず、シンボルマークや交通標識、各種の案内板などデザインの広い範囲にわたっている。このように社会的に大切な役割を果たしている造形言語の学習は、その重要性から言っても「好きな時に好きな者だけが学習すればよい」というものではない。すべての子どもが必修として図画工作や美術の授業を通して学校で学ばなくてはならないものであると言える。

「好きな時に好きな者だけがする」ものは一般的に趣味として認識され、学校では授業として扱われていない。なぜ必修教科なのかについては「読み」「書き」「そろばん」の場合は、理由づけが比較的簡単である。図画工作・美術で育まれた能力も「読み」「書き」「そろばん」と同じように、あるいはそれ以上に社会的に必要な理由が今また問われている。

### 3. コミュニケーションという立場から

ここでは、造形言語という立場から図画工作・美術を必修にする根拠について述べてみたい。日常生活において我々が最も必要としているのがコミュニケーションである。これなくしては、我々の生活は成り立ち難い。そのコミュニケーションの手段の多くを我々は常日頃、言語（文字、音声）に依存している。言語によるコミュニケーションには常に身振り、手振り、表情、動作、色、形、音、匂いなどが重要な要素となっている。それらが伴わないコミュニケーションは、無性格で魅力に乏しく、時にはそれが誤解のもととなることさえある。このように文字言語はコミュニケーション上欠かせないものである。しかし、音声や文字は必ずしも完全なコミュニケーション手段とは言えない面がある。

例えば、仮に今、自分が登山した山について相手に伝えたいと思い、口頭あるいは文章で伝達したとしても、相手にどのような山に登ったのかと

いう情報を明確に伝えようとすれば、かなりの時間や文章量が必要である。しかも、相手はその山について正しくイメージしてくれるかどうかは不明である。

しかし、そこに1枚の写真（映像）あるいはスケッチ、図示などがあれば音声や文章で表現しにくかったものが瞬時に、しかも如実に伝わる。中でも、自筆の個性あふれるスケッチは登山者が抱いた山の印象を楽しく伝えるメッセージという意味で、互いの心を温かく結びつけてくれるものを持っている。

このように、我々が互いにその意志・感情・思考を伝達し合う手段は、音声や文字だけに限らない。前述のように、身振り、手振り、表情、動作、色、形、音、匂いなど（non-verbal language）があり、いずれも普遍性がある。

国内外での児童・生徒の造形作品展や造形活動を通して、国々や個人が理解を深め、平和な友好関係が継続している例がたくさんある。大震災後に福島大学の渡邊晃一による「Koi 鯉アート のほり」での作品は、文字言語を超えて世界中に発信され、アーティストや教育者、そして子どもたちに多くの共感を与えた。

自分が伝えたい情報が相手に正しく、しかも温かい情感を伴って伝わった時に、初めて人間的なコミュニケーションが成立すると言える。このことがうまくいかないと、個人、国家を問わず関係が悪化して平和な関係が維持し難くなってくるとは言うまでもない。

### 4. 造形言語能力を育む試み

現在の教育は、「読み」「書き」の文字言語能力を育むことに重点が置かれ過ぎていて、「話す」能力の育成が二の次になっている。造形言語で「読み」「書き」「話す」試みは、その文字言語能力を高めることにも役立つものである。現代絵画の父と言われるセザンヌは自然を円筒形・球形・円錐形によって扱うことを勧めた。それらは平面的には○△□の要素を含んでいる。また、フレーベルは恩物（Gift）の基本的な考えとして、創造的な遊具について言及し、「…創造的な遊具とは複雑なものや完成された既製品ではなく、むしろ単純な基本的な形であって、しかもその単純な内にも多様

なものを含んでおり、基本的なものの中に創造していくのにはなくてはならない要素としての理論的な、物理的な契機を含んでいる形でなければならない<sup>(2)</sup>として、○△□を要素とした積み木を考案している。

セザンヌやフレーベルの考えにヒントを得て、造形言語表現能力を育てる原初的な教材として○△□を考案、実践してみた。

造形言語表現には、心象表現と機能(適応)表現が考えられる。本稿では、主として機能(適応)表現におけるイメージ表現と共有について述べたい。

■言語表現と造形言語表現の転換

本稿では、○△□のうち、例として△に基づく言語表現と造形言語表現の転換の試みを授業案として紹介する。

■授業の流れ(小・中・高)

△が部分あるいは全体の形としてあるものを(1)想起する→(2)口頭発表(クラス全員)→(3)文字言語で記録→(4)造形言語で表現する→(5)文字言語を無作為に組み合わせて物語をつくり、視覚化する(漫画、アニメなど)→(6)発展課題に移る。

■授業展開

(1)△でイメージできる形(全体あるいは部分)を個人の経験・知識などから想起する。

(2)口頭発表(発表力の向上)

- (例)①屋根 ②犬の顔 ③人の鼻 ④おにぎり ⑤テント ⑥ヨットの帆 ⑦山 ⑧蝶 ⑨サンドイッチ ⑩こま ⑪狐 ⑫ラッパ ⑬にんじん ⑭トライアングル  
・その他、一人1例発表する。

(3)文字言語での表記(記述力の向上)

・口頭発表したものを文字言語で記録する(学年に応じて、ひらがな、カタカナ、漢字表記)。

(4)言語表現したものを造形言語で表現する。

・(3)の文字記録に従って色、形などで多様に表現する。描画材料、表現形式など自由にして個人の想像力、創造力を伸ばす。(例1~2)

(5)文字言語で表記したものを無作為に抽出して(抽出個数は自由)簡単な物語をつくる。抽出数は最初少なく、次第に増やす(言語能力の向上)。(例)前記(2)の④ ⑭

・(2コマ)物語例:「おにぎり食べながらトラ

イアングルを叩いていたらご飯粒がトライアングルにいっぱいついてしまった」

・(3コマ)⑥ ⑧ ⑩

(例)「ヨットに乗ってこま回しをしていたら蝶がこまにとまって目を回した」

・(4コマ)① ② ③ ⑫

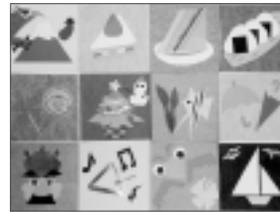
(例)「屋根に人が登ってラッパを吹いていたら犬が吠えまくっていた」など。

番号の組み合わせは他者に依頼するとよいし、物語は理屈に合っていないくてもよい。頭の体操のつもりで友人どうしで行う。

・子どもたちの興味・関心に応じて組み合わせ数を増やしていく。

・△からの想起

(例1) 貼り絵形式



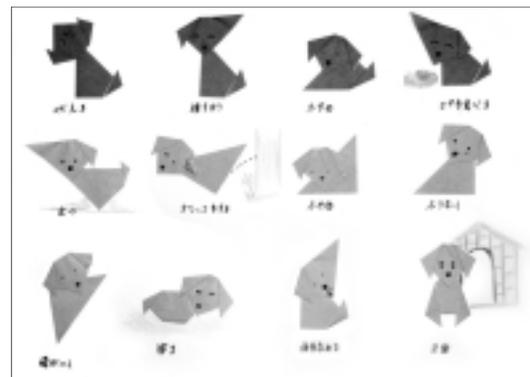
(例2) 1枚の絵で表現



(例3) 簡単な物語(○のイメージ・4コマ)



(例4) 犬のポーズ(貼り絵)



5. 課題の継続性と発展性

△を2個にすることで課題を発展させることもできる。▽と△を組み合わせるとイメージは△1個よりも広がる。例えば、犬の頭と胴体という組み合わせで考えると(例4)のように、犬が示すいろいろなポーズの表現となる。

■授業のねらい(小、中、高)

- (1)想像力、創造力を豊かにする。
- (2)多様な描画方法を開発する。
- (3)造形言語表現の楽しさを味わう。

■授業の準備

柔らかい鉛筆類あるいはサインペン、マーカー、画用紙、ケント紙のほか課題に応じて準備する。

■授業展開

△の紙が誘発するイメージ

- ・簡単な形による複雑な形の連想。
- ・複雑な形から単純な形へのまとめ。
- ・易から難へ、発達段階に応じて。

A. 平面の試み(小、中)

- ①三角形をもとにしたイメージ訓練。
- ②例としての犬の顔。▽
- ③犬の顔の特徴(視覚)。例、耳の形。
- ④犬の胴体。△
- ⑤顔と胴体の組み合わせ。▽△
- ⑥平面上のさまざまな試み(例4)
- ⑦音声との組み合わせ(聴覚)
- ⑧犬の表情・しぐさなどの身体表現(身ぶり、手ぶりなど)(体育科と関連)
- ⑨肌触り、匂いなどの思い出(触覚、嗅覚)

B. 立体の試み(小、中、高)

- ①紙類による表現。
- ②他の材料による表現(粘土、焼物、針金、ひも、藁、板材、角材、流木、アルミ材、廃材など)

C. 課題例(学年を追って)

- ①犬の作品スケッチ(線描あるいは明暗)
- ②作品完成までの過程を絵で示す(文字の補足も可)。
- ③イメージ訓練したものにヒントを得て、ストーリーを作成し、何コマかの漫画を作成する。
- ④作品から現実の犬を想像で描く(見ることの大切さ)。
- ⑤その他の試み(他教科との関連づけ)

- ・犬の折り紙
- ・犬の玩具・民芸品、犬のいる風景
- ・人と犬のかかわり(社会科と関連)、動物愛護(思いやり・道徳心)(道徳科と関連)
- ・子犬のワルツ(音楽科と関連)

6. おわりに

造形言語の課題を発達段階的にこなす過程では、他教科や道徳などと関連しての指導が望まれる。

■造形言語から文字言語への転換

青年期にある中高生に自我を見つめる機会を与えることは大切である。制作中に画面と対話(コミュニケーション)することで、色や形などを用いての表現後の文字言語による自己表現が形式・内容ともに豊かなものになるということが期待される。同じようにして、文字言語表現からイメージして造形言語で複雑な経験や知識、情動などを自分のものとして表現することも可能である。



生徒作品「夢」  
(ケント紙四つ切り、ポスターカラー、制作時間8時間、高校1年)

作品のいずれからでも、色や形などを通して複雑な心の内を瞬時に読み取ることができる。作者(女子生徒)は、「ガラスのビンの中につまんで、海底探検。ガラス越しに見ている海の中はとてもきれいで夢がいっぱい。でも一歩外に出てみればきっと怖いこと危険なこともいっぱい。今の私はまだガラスビンのなか…」と解説している。

(なかせ のりひさ)

<注>(1)『教育美術』2011年6月号、p.55  
(2) 荘司雅子『フレーベルの生涯と思想』、玉川大学出版部、1992年、p.193

## 被災者の立場で美術(支援活動)を考える

アトリエ・コパン美術教育研究所代表、宮城教育大学講師 新妻 健悦

### 1. 津波襲来

3月11日、チリ地震津波の私の経験は何の役にも立たず、むしろ津波の威力を侮った。全壊地区の自宅は大破。私たち夫婦は内陸のアトリエにいたが浸水し、逃げ遅れて屋根裏に閉じ込められた。妻は3日目にボートで救出され、私はごみ袋と布テープでドライスーツをつくり、胸まで浸かって脱出したが、途中で転び、全身に冷水がまわった。気温はマイナス、濡れた体を温める術はない。しかしその冷たさを感じている余裕もなかった。被災の当夜、避難所となった学校には住民が殺到した。校舎に入りきれない人々は雪の降る中、校庭でペンギンのように立ちつくして一夜を明かす。それでも緊張下では風邪もひかなかったと聞く。

その後、私たちは生き延びるために水や食料を捜して徘徊した。安穏と暮らしていた「日常」が一瞬にしてはぎ取られ、「救援物資が届く」の発想すら思いつかなかった。これが戦時下の状況なのかとの思いもよぎったが、極度の緊張状態では現実感が湧いてこない。現実絵空事のように流れ、切迫した状況であるはずなのにそれが感じられない。集中力はかえって弛緩してしまう。



被災後の雪の石巻(北上川)

### 2. 新鮮なコミュニティ

電気・水・ガスが止まり、車も壊滅。それでも被災3日目には自主的に町内の駐車場で炊き出しが始まった。近所の人たちが集まり、古井戸が再開され、被災をまぬがれた食品を互いに供出して野外の鍋料理となった。寒空に向かって湯気が真っ白に立ち上がり、貝や魚肉も惜しげもなく投入

され、妙味に心も温まる。素顔の女性たちは手を赤くして炊事に励み、男たちは瓦礫や板塀を壊し、燃やして暖をとる。道行くどの人にも「食べていってー」「温まっていってー」と叫び、見知らぬ人どうしが集い、無事を語る。往来で出会う人と人は伝染したように声をかけ合い、挨拶を交わす。被災以前にはなかった光景が街中に広がっていった。自然発生的に人々がつながり「ピュアなコミュニティ」が生まれ、私もその一体感に気負いなく溶け込んだ。この経験は、その後の美術的支援活動を考えるもととなっている。

### 3. ボランティアさん

2か月が経って水と電気が通じ、テレビの情報が入ると原発の深刻さが二重にのしかかる。給湯は3か月後で、朝シヤンの習慣が断たれたことで私の乾燥性フケ症が有り難いことに治まった。気掛かりは、通水の遅れから家やアトリエの片づけが遅々として進まぬことだった。そんな折、全国からボランティアさんが大挙して石巻周辺に駆けつけた。連日、市内各地には若い男女に交じり著名な美術家もお忍びで参加し、長靴や軍手に頭巾姿でグループを組む。我が家では2回ほど瓦礫とヘドロのかき出しをお願いした。ボランティア活動が初めてという彼らは慣れない手つきでブロック塀を運び危ぶまれたが、何よりその気概と志、控えめな誠実さに痛く感動させられた。

どのボランティアさんも自前で食事を調達し、活動の対価は求めない。宿泊も持参のテントを使い、依頼者には一切負担をかけない。その信条がすがすがしい。我が家からはトラック14台分の瓦礫とヘドロが運び出された。復旧への大きな前進となり、前向きに生きる勇気を与えていただいた。これらの活動は“日常”を取り戻すお手伝いであり、途方に暮れていた多くの市民同様、私も感動

の涙を流した。

### 4. 美術の日常と非日常

市井の生活者にとって美術とは、“日常”が保障されて成り立つ。被災者となって改めて自覚した。つまり日常が恒常化するからアートのもつ「非日常の世界」に惹かれるのだろう。ところが、支援のアーティストの中には非日常化した光景に触発され、その場に転がる瓦礫の一部をオブジェの素材として、またはワークショップで使うと言い出す。しかしその場に暮らしていた住民は惨憺たる現実を前にして、以前の光景が脳裏を駆け巡る。津波襲来直前までの我が家の居間やダイニング、ソファや食器など愛用品の感触が甦るのだ。どんなにヘドロにまみれようとも、どれ一つとして捨てたものではない。津波によって無理やり関係性が断ち切られただけで、すべてに生活者の温もりが詰まっている。ある女性は「なんで作品づくりだと言ってむごいことをするの」と呟いた。

現代人の日常は、人と人の関係がほどよい距離で保たれている。基本として相互不可侵のゆるい関係で営まれ、その関係を侵すと傍若無人となり、嫌がられる。つながりとしての“間”が大事になる。被災後に生まれた「ピュアなコミュニティ」では人との密な関係が構築された。生き抜くための共同体であり、肩書きや地位も白紙とした上で人としての信頼をベースにつながりをもとうとする。共同体では身勝手な振る舞いはもちろん、その共同体から逸脱することは命を危険にさらすことであり、できない。初期の避難所がそれに該当する。そんな状況の中、美術的支援活動がやって来た。

### 5. 美術的支援活動

被災地には、美術的支援活動が全国各地そして世界からも訪れた。その支援の高揚感と熱意には深く感謝を申し上げたい。しかし被災の程度や回復段階、その経過期間によって受け入れ側の状況は変わっていく。ある時は、時期尚早の活動内容となって受容者とミスマッチを起こす。受容者に負担をかけず、被災を一瞬忘れられる楽しい活動もある。しかし活動に参加できるのは、比較的被災の軽いや造形活動が好きで、余剰エネルギーに満ちた子たちであって、心的ストレスを抱え

た子が参加することはまれである。しかも見ず知らずの人との関係構築は容易ではない。

また、受け入れ先となる学校や避難所も非日常下であって、先生や関係者は日常を取り戻す仕事に忙殺されている。非日常下に暮らす子どもたちに支援活動と謳い、非日常的世界となるアクションをさらに要求することはいかなものだろう。また、密な関係で築かれた「ピュアなコミュニティ」に、日常側の「自由な振る舞いの謳歌」をまとったアーティストの来訪には、正直違和感を覚えてしまう。緊急時の共同体には美術活動の入り込む余地は果たしてあるのだろうか。それは私が被災者になって初めて気づいたことである。

### 6. 美術はどこへ?

そして1年が過ぎた。予想したことではあるが当初の密な人との関係は解消され、往来する人との挨拶もめっきり失せた。従来の日常を取り戻したためだ。衣食住が充ちて人との関係はかえって皮相となる。渴いたのどを潤すように、美術はその間隙を埋めるために必要とされるのか。

社会から遊離したい心境となる時に、人は美術作品のもつ不変性や恒常性に惹かれる。人との関係が不安になると作品のもつ吸引力や、見る側の思いを一切否定しない寡黙さに浸ろうとする。美術活動は本来、人を否定せずにすべてを受容し、その美術の前で人は素直になっていく。一方、美術活動は社会との関係構築の違いによって大きく変わる。表現者としてはメッセージを作品に託し、社会との関係を顕在化させる立場がある。その反対に、内向きで探索的な世界を求める立場もある。内省的な制作姿勢だ。

それでは美術的支援活動はどこに向かうのか。まずは受容者との関係構築が前提となる。しかし活動はシナリオ通りには進まず、手探り状態となるだろう。今後は、活動の内容や質の検討、さらに受容者の心的状態に対応する支援の妥当性が考究されるべきだ。従来からの、先生対子ども、親対子どもの関係図式の中に新しく子ども対支援者の関係が生じた。「社会」対「個」の構図に置き換えれば、そこに成人の第三者が緩衝の“間”として入り込む。これからの美術活動のあり様が逆照射されるだろう。(にいつま けんえつ)

# 社会の中で子どもの力を生かすために

千葉県立美術館研究員 東 健一

## 1. はじめに

個人的な話で恐縮ですが、バブル崩壊が叫ばれた90年代初頭、私はまだ高校生で、これから自分たちが出ていく社会がどんどん失速していくような雰囲気を感じて日々を過ごしていました。まるで社会全体が、いきなり夕暮れ時になってしまったかのような気がして、同時にこれから夜の帳が訪れるのだという微かな恐れを抱いていたような記憶があります。大学に進学してからも「景気のどん底」だとか、「就職氷河期」だとか、巷には暗い言葉が溢れていましたが、街並みの景色はいつもと変わらず、私の生活にも劇的な変化は訪れませんでした。しかし、世の中には重苦しく沈滞した空気が垂れ込めていて、何だか私は白夜の中でこの20年間を生きてきた気がします。

そんな時に、あの大震災が発生しました。私の住む千葉市でも、道路が波打ち、近所のコンビナートにあるガスタンクが爆発して、キノコ雲のような黒煙が立ち上りました。想像を超える被害に唖然とし、いよいよ本当の暗闇が訪れたのだと思いました。あの震災から1年が経ちましたが、今の私の心境は不思議と闇の中というわけではありません。圧倒的な破壊と悲劇を目の当たりにして、それでも、何かが吹っ切れたような気がしています。

特に、利便性と科学技術の象徴であった原発のトラブルによって、私が高校生の時から感じてきた世の中を照らす太陽とは、物質的な豊かさの象徴でしかなかったのだと気づかされました。これから新しい価値観をもって新時代の夜明けを迎えるのか、沈滞と諦めの闇の中に落ちるのか、どちらにも進むことのできる朝でも夜でもない時。今を生きる我々自身が、夜明けか闇かを選択すべき時は、今なのだと思います。まさに「ゼロから造形教育」を始めるにふさわしい時期だと考えます。

## 2. 美術館で感じた、子どもたちの変化

私は約10年間、公立中学校で美術教員として勤務した後、2年前から千葉県立美術館に勤めています。震災以降、出張授業などで学校を訪れ、子どもたちの確実な変化を感じました。一言で言うと、震災前よりも授業がやりやすいのです。具体的には、話をちゃんと聞いている子が多いというか、話を聞かない子が減ったというのでしょうか。言い方が難しいのですが、反抗的な態度をとる子どもが減ったような気がします。たまたまそういう学年・学級に出合っていたのかとも思いましたが、美術館の出張授業では、幼稚園から高校まで出向いて行くので、特定の世代の聞き分けがよくなっているというわけではなさそうです。その理由を考えていた時に、千葉市内の中学校と連携モデル校事業を展開することとなり、そこである出来事を目にしました。

この連携モデル校事業の内容については後述しますが、「今の世の中について思うこと」というテーマで、全校生徒250人が書いたメッセージカードには、社会に対して批判的な内容の文面がほとんど見られなかったのです。私が学校現場にいた時には考えられないことでした。そこで、担当の先生に「批判的な内容を書かないように指導されたのですか？」と質問をしましたが、そのような指導は全く行わなかったそうです。それどころか「今はこんな大変な時代だからこそ、自分たちが頑張って明るい未来を築きたい」という主旨のメッセージが数多く見られました。

震災をきっかけにして、子どもたちは気づいたのだと思います。大人の社会は、彼らの反抗を受け止めるだけの体力を失っていることに。彼らにとって、もはや大人の社会は乗り越えていく対象ではなく、協力してともに作り上げていかねばならない状態であることに気がついたのです。

## 3. 社会の中で子どもの力を生かす

私は、これからの教育は「学校という枠内だけで、将来に必要な知識やスキルを身につけさせてから、子どもたちを世の中に送り出す」という発想を見直し、「地域の中で、子どもたちの能力を発達段階に応じて発揮させていくことにより、達成体験を伴わせつつ、社会の一員としての自覚を促していく」という考え方に転換していくことが必要だと思います。極端な言い方をすれば、子どもたちの力を下手に温存させずに、立派な社会の担い手として、できる範囲のことをどんどんやらせる。子どもたちを無責任な傍観者にさせないということです。

そして、それは社会見学や職場体験を増やす方向ではなく、積極的に地域で行われる諸活動に、子どもたちを当事者としてかかわらせていくことが重要になるのです。私は、その手段として造形教育は他の教科に比べて、はるかに社会とつながりをもつことのできる可能性を秘めていると考えます。その例として、前述の連携モデル校事業を紹介したいと思います。

昨年、千葉市美浜区を中心に展開されたアートプロジェクト「創造海岸2011『美浜だれでもアーティスト』」に、同地区にある千葉市立磯辺第一中学校が、千葉県立美術館と連携して参加しました。「今の私から、なりたい未来の私へ」というテーマで、全校生徒一人一人の等身大の全身壁画を制作し、それをインスタレーション作品として美術館に展示しました。また、会場の中央には、海のすぐ傍りに立地する磯辺第一中学校の象徴として、船をモチーフにした巨大なオブジェを設置し、そ



の船の航跡をイメージした泡が、前述の「今の世の中について思うこと」というメッセージカードになっていました。

この取り組みは、さまざまな組織が連携したアートプロジェクトの一環でしたので、実行委員となった美術部員は、県立美術館の学芸員以外にも、地域で活躍するアーティストや、千葉大学の先生や学生、プロジェクトを運営するNPOの職員、市民ギャラリーの学芸員の方々とかかわり合いながら、この展示会をキュレーションしたのです。また土日には、展示会場で美術部員によるギャラリートークも行われ、展示会のコンセプトについて説明するとともに、各々の作品についての紹介などを行いました。



アートプロジェクトの期間中、美術館では実行委員(美術部員)を一般の展示会実施者と同じように扱ってもらいました。つまり、中学生だからといって、お手伝いや体験というレベルで扱わず、他のプロジェクトを実施した大学生やアーティストたちと同じ立場で参加してもらったのです。最初にその説明をした時、青い顔をしていた彼らでしたが、千葉市長へのギャラリートークも見事に成し遂げ、顧問の先生の手厚いご指導と支援を受けつつ、素晴らしい展示会をやり遂げました。

これは、ほんの一例でしかないのですが、社会の中で子どもたちの力を生かすことに主眼を置いた教育活動を展開していくためには、学校や地域社会の努力はもちろん必要ですが、美術館などの社会教育施設が両者を結びつけるきっかけづくりを行うことで、ますます活性化していくように思います。

(あずま けんいち)

# 私の失敗談

～新米先生のために～

NPO法人市民の芸術活動推進委員会理事長、  
武蔵野美術大学講師 鈴木 弘之



## 1. 役に立たないじゃないか

「私の失敗談」というタイトルのシリーズが始まるのだという。そのトップバッターとして、何か書いてほしいと依頼があった。実を言うと、2005年に「失敗の連続」(『造形ジャーナル』388号、p.4～5)という拙文を執筆している。初めて出会う1年生との交流を書いたように思う。教師であるぼくの言葉一つで、まったく予想もしないことが起きてしまうことを…。

今回は、新しい先生方へ向けて先輩の失敗を書くことが、新しい先生にとって、同じ轍を踏まないための予防線になるのだという。でも、どうなんだろう。そのような予防薬みたいなことをいくら知って、どうにもならないのだよと、最初に釘をさしておこう。

だって、人が人を教えるのだから、ある人とある人は、まったく生い立ちから学んだ事柄が違っている。文部科学省が子どもたちの学力について言う「資質能力」は、教師にも当てはまるのだろうか。

その上、教育状況がまったく違っていることも押さえておかなければならない。ぼくが教師になった昭和43年頃は、まだまだいい加減なところが随分あったように思う。教頭先生は野球好きで、いつも教頭机に足をのせてラジオから流れる野球放送を聞いていた。仕事もそんなになかったのだと思う。3時30分も過ぎると、中華料理屋さんに出前を頼んで、餃子が届くと、冷蔵庫からビール瓶を取り出され、冬にはだるまストーブを囲んで宴会が始まる。職員室でのことだ。

あきれかえっちゃうだろう。それがぼくの新米先生の始まりだった。もちろん全員の先生がそこに集まるわけじゃない。遠巻きにしている先生も

いた。そしてそれを批判する先生もいた。だが、だるまストーブ組は組合活動にも熱心で、校長相手に団体交渉も毎年やっていた。賃金を上げろって。ぼくは学生運動もしていたから、当然、だるまストーブ組に自ら入っていった。

今はどうなんだろう。現場を離れてもう6年にもなる。きっと厳しい統制が敷かれているに違いない。退職前には主幹もやったから、統制の側に立たざるをえなかった。主幹や主任教諭など5職階級の仕組みは、何十年もかかって、ようやく仕上げた方法だ。抵抗することが極めて難しいことになってしまった。

## 2. 若い頃のぼく

右の図版は、初めてぼくの実践が『美術教育』誌に取り上げられた版画だ。でも、もう9年も経過したあとのことだ。9年も経てば、大概、子どものことが少しはわかって、子どもの海の中を泳ぐことができるようになる。そうでなかったら、もう資質がないとあきらめて、さっさと職を辞したほうがいいかもしれない。

本題は、それから遡ること9年。新卒の年のこの記憶をたぐり寄せよう。

大学を卒業したてで、何も分からず、最初から図工の先生として教壇に立ち、指導しなければならない。学校という仕組みは年齢を問わずに、同



「三コ」版画(小学5年男子)、  
原作・滝平二郎

等だ。居並ぶ先輩は、学校で一人だけの専門家としてぼくを認知している。だから、その「清水の舞台」は恐怖でさえあった。

教科書には、機構的工作とでも呼べるジャンルがあった。ひのき棒などで橋や塔などをつくる建築的なものや、クランクなどを利用した動くおもちゃだ。

橋や塔をつくることを最初の6年生に提案してつくってもらうことにした。ふんだんにひのき棒や小割り、竹ひごなどを用意した。若気の至りというのだろう。ミニチュアのような掌に乗るような小さなものはつくらせたくないと考え、身の丈の半分ほどの高さの塔をつくるように要請した。するとどうだ。全員がぼくの挑発にのって、馬鹿でかいものがたくさん出現して、うれしくなった。でも悲劇が控えていた。いくら後始末をせよと号令を掛けても、だめだ。おがくずや紙くずが山ほど残っているのに、さっさと教室へ引き上げてしまおう。残されたぼくはたった一人でごみ掃除。6年生は3クラスあったから、週の2日はごみと格闘するはめになった。とつても切なかった。辞めたいとさえ思ったものだ。

最初の6年生は、だから全然覚えていない。敵のような子どもたちは、ぼくとたった10歳しか違いがなかったのだ。尊敬されるはずがない。頭ごなしにいくらがなり立ててもだめだ。そうすればするほどに反発する。特に少年たちは…。

人間が人間を教育するという不条理を嫌というほど味わってしまった21歳だった。

いくらか打ち解けてくれるようになったのは、その翌年の春。ぼくの勤めていた東京都北区立西ヶ原小学校はまだ、古い木造校舎が1棟残っていた。空き部屋もある1階が図工室で、2階が音楽室だった。その木造校舎が取り壊され、新しく増築された鉄筋の校舎へ図工室と音楽室が移動することになった。春なのに大雪の降った翌日、移動のために6年生が全員かり出されて図工室や音楽室の備品や机まですべてを移動することになった。図工室の重い工作机は裏返しにして、御輿のようにして担ぎ上げて校庭を運んでいった。

運び終えて、6年生全員が歓呼の声を上げた。成し遂げた喜びだ。図工で何かをつくったわけではない。でも肉体を動かしたことで、子どもたち

の心が動いたのだった。ぼくは心から子どもたちにお礼を言った。初めて、強ばっていた心が緩んだ瞬間だった。今ではもう当たり前のようにぼくは、「全身を使った造形活動…」などと言う。身も心も、そのような肉体の活動が基本であることを、それこそ身をもって子どもたちがぼくに教えてくれたのだった。

## 3. サボタージュ

このような若輩のぼくを温かく見守ってくれていた先輩の先生方がいたことも忘れてはならない。音楽の先生は放課後によく音楽準備室へぼくを呼び入れ、いろいろな人生相談を四方山話の合間にしてくれた。5年生の担任だったM、K、Fの3人の先生にはホントに愛情を注いでもらった。

その5年生が6年生になっても、相変わらず、ぼくは子どもの中に入れていない。5月になって暖かくなってきた頃、ぼくは一つのアイデアを思いついた。近くには墓地(染井霊園)がある。画板に画用紙を挟み、筆箱を持たせて、そこへ写生に行くと言って、校長に許可をもらい、出かけていった。ポケットに空き缶を忍ばせて…。

墓地に着くと、ぼくは缶蹴りをすると宣言した。写生をすると思っていた子どもたちは大喜びでぼくの提案を快く受け入れてくれて、みんなで思う存分駆け回り、隠れ遊んだ。いい気分の「写生」だった。

それから程なくして、新しい図工準備室へその6年生が遊びに来てくれるようになった。遊び惚けることはもうしなくなった。ぼくは、彼らに、図工室前の庭に大きな穴を開けて、池をつくることも提案し、皆で掘り進め、セメントを流し込んで池をつくった。

この場合も、力仕事キーワードだ。汗をかくことが、筋肉を動かすことが、創造の原点だと思う。

創造美育協会の黎明期の牽引者であった若き木水育男も、悪たれる中学生に向かっていくのに、自ら率先して田んぼに入って、生徒と一緒にあって、田植えから稲刈りまでの長い肉体活動を経て、ようやく子どもたちの信頼を獲得したと言っていた。

(すずいし ひろゆき)

# 自分の思いを豊かに伝えるために

～「紙芝居」の共同製作を通して～

千葉県千葉市立幕張南小学校 関屋 敦子

## 1. はじめに

自分の思いや願いを豊かに伝えるためには、まず、自分の思いをしっかりとつことが大切である。そのためには、①やってみたいと思える、②表現したいことを明確にする、③表現したいことを工夫して表す力が必要になってくる。

①については、その題材が子どもたちにとって興味・関心をもてるようなものであることと、教師がその題材のおもしろさや魅力を子どもたちにどう伝えるかを工夫する必要がある。②については、参考となる作品や活動に見通しがもてるような資料の準備、表現したいことを明確にするための話し合いや構想の時間が大切である。③については、さまざまな表現技法を経験することを通して、いろいろな表現の可能性を学び、その活用のしかたを考えていく。そこから自分の思いや願いをより明確にし、豊かに表現できるようにしたい。

## 2. 題材について

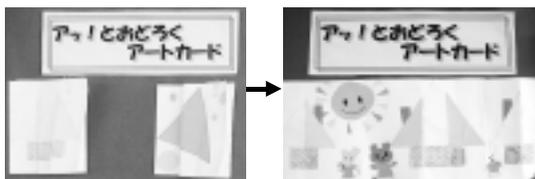
○題材設定について

活動の目的を、縦割り班で一緒に遊んでいる2年生に喜んでもらえるような「紙芝居」をつくり、発表することにした。このように相手意識をもつことで、どう作品をつくったらよいか、その方向性がより明確になるものと考えた。

○小題材でのスキルアップ

今回の題材に取り組む前に、必要なスキルを高めることも兼ねて、二つの小題材にも取り組んだ。

一つは、発想を耕すことを目的とした「アッ！とおどろくアートカード」をつくる活動を行った。これはカードを広げると折り込まれたカードの上ののった三角形が分解してしまうという仕組みで、そこから、それぞれのパーツを何かに見立てて、想像したものを表現する活動である。



もう一つは、表現の幅を広げるためにさまざまな技法を経験させることをねらいとし、「自分だけのすてきな模様紙をつくろう」という活動を行った。ここでは、マーブリング、スパッタリング、ドリッピング、ビー玉転がし、デカルコマニーなど、いくつかの表現技法を体験した。



ここでつくった模様紙は、絵はがきや便箋などに利用するだけでなく、「紙芝居」づくりの模様紙としても活用した。

「紙芝居」づくりでは、小題材で学んだ経験を生かして、切ったり貼ったり描いたり、さまざまな方法を自由に組み合わせてもよいこととし、より自由な表現活動ができるようにした。

## 3. 活動の実際

○題材名：世界に一つだけの「紙芝居」をつくろう

○学年：第5学年

○活動計画：6時間

- ・テーマとストーリーを考える。(国語)
- ・ストーリーをいくつかの場面に分割し、おおまかな画面の構想を話し合う。(2時間)
- ・各ページを個々が分担し、自分が表現したい方

法で画面を製作する。(3時間)

- ・「紙芝居」にまとめて、作品の発表鑑賞会を開き、友だちの作品の工夫やよさを味わう。(1時間)
- ・兄弟学年で「紙芝居」発表会を開く。(読書タイム)

○材料・用具：ボール紙(八つ切り)、色画用紙、色段ボール、アートペーパー、花紙、アルミホイル、おがくず、折り紙、包み紙、モール、割りばし、貝、絵の具、クレヨン、色鉛筆、カラーペン、マーブリング用インク、はさみ、カッターナイフ、カッターマット、セロハンテープ、両面テープ、のり、接着剤、金網、ブラシ、ストロー、ビー玉、グルーガン、新聞紙、トレーなど。

○活動の流れ

- ・題材との出合わせ方の工夫  
導入段階では、簡単なお話の絵本をいくつか紹介し、ストーリーの展開や場面の変化のおもしろさを味わわせ、絵を通して話をつくることに興味をもたせた。また、アイデアのおもしろさや画面構成、美しさなどについても話し合い、表現の工夫にも注目させた。

・参考作品、資料の活用

表現方法については、さまざまな表現技法を活用した例を紹介し、子どもたちの作品づくりの手掛かりとした。

○ストーリーと場面づくり

ストーリーの構成については、国語の時間を利用して、2年生が楽しめるお話で、内容が複雑なものにならないようにしたい。単純で絵にしやすいものがよいことなどアドバイスしたり、詩など短く場面が分割しやすいものを紹介したりし、グループごとにテーマを決めて、ストーリーを考えさせた。また、場面の表現の参考として図鑑や写真、イラスト集などの資料も活用し、イメージを広げるための手立てとした。

・人との対話の場の工夫

グループの話し合いでは、どんなイメージを表現するか、いろいろな案を話し合わせ、簡単な画面構成を試させた。また、場面分割が決まったら、場面ごとに各々簡単なアイデアスケッチをし、構成のしかたや効果的な表現方法について話し合わせ、自分たちが本当に表現したいものをじっくり考えさせた。



・製作の場の工夫

各ページを個々に製作する活動では、つくる場面のイメージに沿って、使いたい材料が選べるようにさまざまな材料を集めたり、いろいろな表現技法が活用できるようにコーナーを設けたりした。

・中間鑑賞

製作活動の途中で中間鑑賞の場も設け、互いの作品を見合い、よいところをメッセージカードに書いたり、アドバイスカードでアイデアを伝えたりさせた。中間鑑賞後、子どもたちは意欲的に自信をもって作品づくりに取り組んだり、友だちのアイデアを取り入れてみたりする姿が見られた。

## 4. おわりに

グループ活動では、友だちとの会話や教え合いを通してイメージを膨らませ、自分が担当する場面をどう表現するかを明確にして製作に取り組んでいた。共同で活動に取り組むことで、つまずきを補い合ったり、新しい発想を生み出したりして、互いを高め合うことができた。また、協力してつくることの楽しさも味わうことができたようである。作品は読書タイムを利用して兄弟学年に出向き、読み聞かせを行った。自作の紙芝居を紹介した後、簡単な感想をもらったことで、自分たちの表現への自信がついたようである。



(せきや あつこ)

# 心をつなぐ絵手紙

～地域とのつながりを深め、生徒の自己肯定感を高める～

佐賀県神埼市立千代田中学校 衛藤 拓典

## 1. 美術にできること、美術だからできること

子どもの自己肯定感の低さが言われて久しいが、私がかかわる「美術」を通して生徒の自己肯定感を高めることができなかと考えた。つまり、自信をもって表現に取り組むことのできる生徒を育てたいのである。そこで、本校では昨年かから生徒の自己肯定感を高めることを目的に、全校生徒約320人で校区内に住んでいるひとり暮らしのお年寄りに絵手紙で年賀状を送っている。絵手紙は思いを伝えるコミュニケーションツールであり、直接的に地域とのつながりを深めるのに適した題材である。

自己肯定感を高める指導のポイントは手立ての工夫にある。今回の手立てのキーワードは「可視化」である。人は他者から認められ、褒められるとうれしいものである。自分たちの行為が人の役に立つことを生徒に実感させるためには、この活動を地域の方々に広く伝え、その感想を生徒の目に見える形で提示すればよいのではないかと考えた。そこで、町内の郵便局に活動の趣旨を説明し、展示をお願いした。

## 2. 絵に思いを託す

11月下旬～12月上旬にかけて、全クラスでそれぞれ1時間の授業を行った。絵手紙は同じものを2枚描かせる。1枚はお年寄りへ送り、もう1枚を郵便局に展示することを生徒に伝える。

事前の課題として、十支の「辰」の絵と「あけましておめでとうございます」などの言葉をレイアウトした下絵を描かせる。本題材は、思いやりの心という道徳的心情を育むことができるが、ゴールは美術であることを忘れてはならない。造形上の課題に取り組むからこそ絵手紙に作品としての普遍性が生まれる。そこで、造形的にどのよう

に表現すれば「絵に思いを託す」ことができるのかを生徒に考えさせた。以下は生徒の考えである。

- ・丁寧に描いたり塗ったりする。
- ・元気が出るように「辰」や文字を大きく描く。
- ・気持ちが明るくなるように暖かい色を使う。
- ・文字の形(書体)を工夫する。

授業前の休み時間に生徒の描いた下絵を見ながら賞賛やアドバイスの声を掛けてまわる。生徒は見たことのない「辰」の表現に相当悩んだようだが、その分よいアイデアが生まれている。最初に、生徒会でボランティアを担当するクラスの厚生委員が活動の意義や心構えについて呼びかける。導入で活動の趣旨や手順を説明した後、取りかかる。まず、はがきに墨汁で描画し、ポスターカラーで着色していく。慣れない筆の扱いにとまどいながらも、みんな真剣な面持ちである。余白に「今年も元気で過ごしてください」などと自分の気持ちを書き添え、最後に消しゴムを彫ってつくった一字印を押して完成である。

お年寄りの宛名は個人情報に当たるので、「おじいさん おばあさんへ」とだけ書く。また、差出人のところには「学校の住所、学年、氏名」を記す。出来上がった絵手紙は、社会福祉協議会を介して、地域の民生委員がお年寄りに直接手渡しで届けていただいた。



生徒が呼びかけを行う



辰の絵に悪戦苦闘する

## 3. 地域とのつながりを深める

12月中旬～1月末に千歳郵便局および千代田郵便局を会場にして絵手紙の展覧会を開く。そのた

め、授業が終わると息つく間もなく展示の準備に取りかからねばならない。四つ切り画用紙に絵手紙を8枚ずつ貼りつけていく。効率化を図るため、画用紙にはがきサイズの穴を開けてつくったレイアウト枠を用いた。しかし、隣り合う作品の色みなどを考えながら貼っていると、1クラスの準備に50分程度かかってしまう。まさに時間との勝負である。

飾りつけは郵便局が行う。展示は好評で、年末年始の忙しい中、足を止めて感想を寄せてくれた方は80人に上った。以前は感想ノートを準備していたが、「人に見られるので書きづらい」などの理由で不評であった。そこで、短冊状の感想カードを用意したところ、多くの地域の方々が思いや願い、励ましの言葉を綴ってくれるようになった。「心が温かくなった」「ぜひ来年も続けてほしい」と感想カードに綴られた一言一句に、生徒だけでなく、私も元気づけられた。これらの感想は授業中に紹介するとともに、すべての感想カードを廊下などに掲示した。絵が苦手な生徒の中には、「自分の描いた絵手紙を本当に喜んでくれているのか」という思いをもっている者も少なからずいた。しかし、掲示された言葉を目の当たりした生徒たちは、自らの活動の成果を改めて実感していた。



郵便局での展示風景



感想カードに見入る生徒

学校に届いたお年寄りからの手紙は、コピーを取って校内に掲示する。その手紙は生徒全員に届いているのと同じことだと思うからだ。3年生に届いた手紙にはお礼とともに受験への励ましの言葉が添えられ、文末は「私も頑張ります」と強い意志で結ばれていた。

## 4. 生徒の心の動き

生徒の変容を見取るために、活動の振り返りを行った。これには、生徒が自らの心と向き合い、思いを言葉として定着させる役割もある。

「来年もこの活動を続けたほうがよい」と考える生徒は98%超に上った。また、多くの生徒が「言葉だけではなく、絵があるほうが気持ちが伝わると思う」と答えた。美術のもたらす働きに気づいてくれたのだろう。また、美術に苦手意識を抱いている生徒の多くも「描いているうちに『描きたい』と思うようになった」と自らの心境の変化を感じていた。さらに2・3年生の記述を昨年ものものと比較すると、表現に対する考えや活動の意義への理解が深まり、活動を継続することが生徒の成長につながっていることがわかる。

また、感想カードの提示によって、ほとんどの生徒が地域の人に認められていることを実感することができた。感想カードは生徒のモチベーションを高め、活動を継続させるためのカンフル剤としての重要な役割を担っている。校外での絵手紙の展示は、生徒と地域の間にコミュニケーションを生み出し、地域に潤いをもたらしている。以下は活動を振り返った生徒の感想である。

- ・絵手紙を描き、達成感を感じた。
- ・よいことをすると気持ちがよい。
- ・お年寄りが喜んでくれると自分もうれしい。
- ・絵が人の心を動かすことに驚いた。
- ・全員で取り組むことに意味があると思う。
- ・地域の一員としての自覚が生まれた。

このように記述と数値の両面から、地域とのつながりを深めることで、生徒の自己肯定感を高めることができたと考える。この成果をもとに、生徒が主体的に表現することができるように継続的に取り組んでいきたい。

## 5. おわりに

昨年は、生きることの意味について改めて考えさせられた1年であった。人生の目的は、人を幸せにし、自らも幸せになることだと心の底から思うようになった。

今回の活動では、たくさんの人と心をつなぎ、幸せを共有することができたと思う。これも郵便局や地域の方々の有形無形のご協力のおかげであり、本当に感謝している。

(えとう ひろのり)

## 発想力を呼び起こす活動を

図工室

宮久 孝司 (福岡県豊前市立三毛門小学校)

幼児がお気に入りの石を大事にしているように、子どもは本来、よいモノをとらえる感性をもっている。しかし、既製の品物に囲まれてその感性は埋もれ、経験不足も重なり、つくり出す喜びさえ忘れる傾向が見られる。

子どもがもっている発想力を生かす題材として、身近な材料を利用して生き物づくりを試みた。すると、さまざまな生き物を形づくり、それらを使って楽しそうに遊ぶ姿が見られた。

子どもの発想は、生き物づくりのさらに先へ進んでいるので、絵やコラージュで表現した

画面に生き物をのせると、不思議な生き物が住む世界が生まれた。さらに木工の活動を組み合わせてステージに空間をつくと立体的な表現が生まれ、生き物が物陰に隠れたり、空間を動いたりするような生き物どうしのかかわりが見えてきた。

子どもがのこぎりやかなづちを使う経験に乏しい実態があれば、「虫たちの標本箱」という題材にも応用したい。箱の設計や道具の使用も楽しい経験となっているようである。

複合的な表現ができる活動をする中で子どもがもっている発想力を引き出すとともに、技



能を高められるような題材づくりを工夫し続けていきたいと思う。(みやひさ こうじ)

て最後は作品として仕上げる。

その過程の中で互いのよさや、相手に対する配慮の大切さに気づいたりするように心掛けている。

このような一種の創作交流活動は、遊び感覚でできるものから始めるとよい。新しい集団の中で安心して表現活動ができる環境を整えたときに、子どもたちが本来もっている自由な発想や、のびのびとした表現が生まれてくる。あるクラスでは、「好き勝手な粘土遊び」になりかけたが、話し合い活動が機能していたので、学習活動のルールを自分たちで確認し合うことができた。

単元の目標や表現の楽しさを確認しながら学習を進められるようになったことは、年度当初から大きな進歩であった。

(さいとう たけひろ)



向上を掲げていたこともあって、美術科では共同制作の場面を意図的に取り入れてみることにした。例えば、2年生の立体でイメージを表現する単元において、生活班で集合彫刻に挑戦させている。

表現のための材料は粘土を使用する。個々が自由につくるところから始まり、漠然としたイメージから徐々に班で一つの表現テーマが決まっていく。そし

## 仲間とかかわり合う美術

美術室

齊藤 岳洋 (新潟県妙高市立新井中学校)

久しぶりに大規模校での勤務となり、1~3年生19クラスの美術を担当している。どのクラスも40人近い人数で、一人一人の生徒を把握するまでに1年近くを要し、苦労している。

私の学校は多くの小学校区から生徒が集まる。そのことも影響してか、生徒どうしの関係性に希薄な面を感じる。年度当初は発言したり描いたりする活動で積極性が見られなかった。深くかかわることを億劫にしている面や話し合い活動が機能しないといった場面は、どのクラスでも共通であった。

この年は校内研修で授業力の

## 造形ピックアップ

# 書評『造形教育における授業デザインと授業分析』 佐々木達行(著)

東京造形大学教授 小林 貴史

学校現場において日々実践している先生方は、誰もがよい授業をしたいと考えている。そして、ちょっとでも造形教育をかじったことのある人ならば、そのよい授業とは大人顔負けの上手な絵や立派な作品を生み出すことだけを目的としたものではないことに気づいているであろう。目の前にいる子どもたちが、意欲的に取り組み、その子らしさが存分に発揮されるような活動を目指して指導しているに違いない。それは、教育の成果が見える形での作品だけにあるのではなく、活動を通しての子どもの成長にあることを教師自身が実感として知っているからである。

では、そのような授業づくりのためには何が必要なのであろうか。本書において著者の佐々木氏は、授業づくりを「授業デザイン」と呼ぶことで、より客観的、論理的にとらえることの重要性を説いている。ここでは授業を構成するさまざまな要素を明らかにし、それらがどのように組み合わせられて授業が成立しているのかを理論と具体的な実践例をもとに説明している。そして、このことは授業をどのように評価していくのかという「授業分析」の視点を示すことにもなっているのである。

日々の授業においては、とりあえず目新しい教材を見つけてきたり、手っ取り早く指導のハウツーを求めたりすることでは、見えてこないことがたくさんある。本書は、そのような授業者の授業に対する安直な構えを厳しく指摘しているとも言える。その意味では、魅力的な題材が集められた題材集や誰もがその通りに指導することを求める参考書とは明らかに一線を画するものである。したがって、本書を手にとったからといって、その日の授業をこの中から見つけてきてすぐに実践できるというものではないかもしれない。しかし、それ以上に本書を通して今までは意識されてい

なかった授業の構成要素に目を向け、それらの関係を通して一つの授業がより立体的に見えてくるならば、読者にとってこのことが大きな財産として自らの授業とその実践に生きてくることは間違いないであろう。なぜなら、この授業



東洋館出版社、B5判、164ページ  
定価2,310円

者の授業に対するとらえ方が授業の可能性をも広げることにつながるからである。

学校や研究会での公開授業や実践発表は、授業を通してその授業そのもののあり方や実践からの成果と課題を協議し、教師が学ぶ機会として大切にしたいものである。それだけに、そこでの話し合いが一つの授業の中だけで終わってしまうことは、少々残念なことである。というのも、その授業の妥当性を検討していくためには、教科における他の授業との関連の中からその授業の位置づけを確認していくことが必要となるからである。このことは、授業のもととなる題材をどのように配列し、カリキュラムを構成するのかということも考えることにもつながる。そして、そのときにこそ本書にある「授業デザイン」の視点が検討の切り口として有効になると言える。

このように考えると、本書から学ぶべきことは、「授業デザイン」の考え方を明確にもつことによって可能となる、教科としてのカリキュラム構造を背景とした授業づくりの重要性ということであろう。(こばやし たかし)